

Drawing on Nature: Taki Katei's Japan

World Museum, National Museums Liverpool / 4 October 2019 to 13 April 2020

林 みちこ

はじめに — 展覧会の概要と開催経緯

本展覧会は、イングランド北西部に位置する港湾都市リヴァプールで開催された日本画家瀧和亭（たき・かてい、1830-1901）とその画塾「畊香館」（こうこうかん）に関する企画展である。瀧による花鳥画の下絵、画塾の弟子による臨画など、紙本の素描類が約88点、初公開された。これらの作品群がどのようにしてリヴァプールにたどりついたのかは後述するが、長く収蔵されたのち、近年調査が進み、初めて展覧されたのである。（図1）



図1. 展覧会ポスター

展覧会の監修者ロジーナ・バックランド氏（Dr. Rosina Buckland）はスコットランド国立博物館（National Museum of Scotland）の学芸員を勤めていたときに、今回初公開となった畊香館の下絵群を発見し、悉皆調査を行った。展覧会開会后にはカナダのロイヤル・オンタリオ博物館（Royal Ontario Museum）に移籍し、その後さらに移籍して現在は大英博物館（British Museum）の日本コレクションにおいて主席学芸員として勤務している。バックランド氏は瀧和亭のモノグラフ *Painting Nature for the Nation: Taki Katei and the Challenges to Sinophile Culture in Meiji Japan* (Brill, 2013) を上梓しており、その画業や画塾の実態を詳らかにしている瀧和亭研究の第一人者である。

他館に巡回しない単館の自主企画展であり、また日本国内でも未だ開催されていない瀧和亭の展覧会がイギリスで開催されるという稀に見る機会であったことから、筆者は2019年末に現地へ赴き視察、監修者のバックランド氏と面会することができた。今振り返ればその直後から2020年の年初にかけて未知の肺炎として新型コロナウイルスが発見され、瞬く間にパンデミックとなり世界が長期にわたるコロナ禍にみまわれたのであった。

1. 瀧和亭とは

瀧和亭は1830年（文政13）江戸に生まれ、大岡雲峰に学んだあと長崎に遊学し木下逸雲、陳逸舟らの導きで明清画を修めた。中国の画論に通じ、日本画壇においては西洋画を取り入れようとした新派に対抗する旧派の画家として指導的立場にあった。得意としたのは没骨描法による華麗な花鳥画で、ウィーン万博、フィラデルフィア万博、シカゴ万博に出品するなど国家を代表する画家として認められ1893年（明治26）には皇室技芸員に任じられている。主催していた画塾は畊香館と名付け、湯島聖堂近くのお茶の水に開き多くの門人を集めた。1884年（明治17）には手本として『畊香館画贖』を発行している。^①

近代日本美術史の学徒にとっては瀧和亭よりも長男の瀧精一の名のほうに馴染みが深いであろう。精一は東京帝国大学の初代の美術史学教授であり、美術研究誌『國華』の主幹として日本近代美術史を牽引した。

2. 瀧の弟子、石橋和訓について

今回展示された下絵類は、瀧和亭の弟子であった洋画家の石橋和訓（いしばし・かずのり 1876-1928）が受け継いでいたものであった。島根県出身の石橋は地元の須佐村で南画、松江で油彩画の手ほどきを受けたあと17歳で上京し翌年の1894年（明治27）畊香館に入門した。このころまでは本名の倉三郎を名乗っていたが、1901年（明治34）9月に瀧が死去すると、師の名前の一字を受け継いで和訓と改名、出身地である島根県飯石郡西須佐村（現・出雲市佐田町）の役場に改名届を出した。東京ではまた洋画家の本多錦吉郎に油彩画も教わっている。こうしてみると日本画・洋画ともに旧派の画家に師事したということになる。1903年（明治36）12月にイギリスに向かって出航、翌年到着しロイヤル・アカデミーを受験し合格している。それからは油彩画を学び、ジョン・シンガー・サージェントに師事して洒脱な筆致の肖像画を修得した。ロンドンでの後ろ盾となったのはレナード・ヒル博士という医学・生理学者で、このヒル博士からイギリス国内の上流階級の名士を紹介され人脈を広げていったものと思われる。

イギリスでの石橋は油彩画家として自立するとともに、日本画も並行して描き続けており、師の瀧和亭譲りの花鳥画で日本最良のイギリス人から日本人画家へ寄せられる期待に応えていた。自らの出発点であった日本画への想いは洋画家になったあとも持ち続けていたのである。

3. 下絵がリヴァプールにたどりつくまで

展示会場では、これらの下絵がなぜリヴァプールの博物館に展示されているのかをチャートで示していた。(図2)



図2. 作品の移動を示すチャート

このチャートによると経緯は以下のとおりである。

・1901年以降、石橋和訓が師瀧和亭の歿後にこれらの作品群を取得した。のちにイギリスに持ち出す前に石橋は自身の素描も加えてひとまとまりのコレクションにしたようである。

(1904年、石橋和訓渡英)

- ・1913年 セドリック、キャサリン・ボルト夫妻が石橋からこのコレクションを購入
- ・1950年 息子のエイドリアン・ボルトが父の歿後に同コレクションを相続
- ・1956年4月 エイドリアン・ボルトが同コレクションを Liverpool Public Museums、すなわち本展を開催した現在のワールド・ミュージアム(World Museum)を含むリヴァプール公立美術館群に寄贈。同時に作品はいくつかの美術館に分散する。
 - ① 1956年4月 Regional College of Art, Manchester) (現在の Manchester Metropolitan University)
 - ② 1956年4月 Salford Museum
 - ③ 1956年5月 Horniman Museum, London

2019年6月 National Museums Scotland へ

この経緯については展示会公式サイトに掲載されている特集記事でも読むことができる。²⁾

4. ボルト家について

この一族については、石橋から素描コレクションを買い取った両親よりも息子のエイドリアン・ボルト Sir Adrian Cedric Boulton (1889-1983) のほうが一般に有名である。ライプツィヒ音楽大学で作曲・指揮を学んだエ

イドリアンは、バーミンガム市交響楽団、BBC 交響楽団の指揮者を経て1951年にはロンドン・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者となる。エルガーの作品の再評価につながる再演、ホルスト、ヴォーン・ウィリアムズなどのイギリス音楽を多く指揮した。34歳の若きエイドリアンを描いたのが石橋和訓で、1923年のロイヤル・アカデミー展覧会に出品 (cat. 309)、現在はロンドンの王立音楽大学 (Royal College of Music) に所蔵されている。³⁾

石橋はロンドンのロイヤル・アカデミー展や肖像画・油彩画・水彩画の各王立展覧会などに出品すると同時にパリの国民美術協会にも出品した。イギリス国内ではほかにリヴァプールにあるウォーカー・アート・ギャラリーの秋の展覧会 (Liverpool Walker Art Gallery, Autumn Exhibitions) にも出品していた。1911年から1916年、1923年に出品している全14点の中で特に目立つのがボルト一族の肖像画で、令嬢のオリヴ・ボルトについては2点も出品した。

1911 Cedric R. Boulton, Esq. (cat. 48)

Olive, daughter of Cedric R. Boulton, Esq. (cat. 230)

1914 Olive, daughter of Cedric R. Boulton, Esq. (cat. 1032)

この出品歴はパトロンとの密接な関係を示すものである。

5. 展覧会構成と展示の工夫

素描ではあるものの着彩された大判の紙本作品は和亭の華麗なる花鳥画を想像させるものであり、会場構成にも工夫がみられた。Drawing on Nature という展覧会名どおり、草花や鳥たちといった自然をいかにして描写したのか、ジャポニスムの画家たちが最も関心を寄せた日本人の自然観を理解することができる展示であった。

捲りの状態の素描類は壁面に直接固定され、前面にアクリル板を設置する形での展示がなされていた。(図3) エアタイトのケースではないため保存管理の点では課題



図3. 展示の様子

はあるが、作品に接近して細部を鑑賞することができた。

和亭の紹介パネルについては、肖像写真と履歴に加えて A Travelling Artist として日本地図に和亭が行脚した各地をプロットしルートをつないだ「旅する画家」の解説が目をついた。その壁面と向かい合う場所に用意されたのが素描コレクションをもたらした弟子の石橋和訓についての紹介である。画家の肖像写真にはあえて、日本画の壁画パネルを制作する様子をとらえた写真が選ばれ、洋画家石橋和訓が日本画家でもあったことを端的に示していた。この写真は石橋の画業のなかでも特に重要で、同時に解明できていない London Hospital 壁画の制作を取材したものである⁽⁴⁾ この写真とともに掲げられたパネルに詳しく記されたのが先述した、コレクションの経緯にまつわるチャートである。

次のコーナーでは素描コレクションを石橋から購入したボルト家の紹介がなされていた。先述したエイドリアン・ボルトの肖像画が王立音楽大学から借用され展示しており、その傍らには 1913 年 7 月 20 日にキャサリン・ボルトが石橋に宛てた手紙の一節が引用されていた。それによればコレクションに和亭の素描と石橋自身の素描が含まれていたことが明らかである。

続いてのコーナーでは An Artist's Archive として畹香館に関する写真と紹介文がパネルで提示されていた。神田川沿いのお茶の水にあった畹香館の写真と門下生の集合写真からは、女子の画学生もいたことが窺えた。これらの写真資料や画塾に関する情報はバックランド氏の著作からの引用であった。

会場中ほどには畳を敷いたワークショップのコーナーがあり、造花をスケッチできるように設えてあった。またその隣には造花の桜の木と縁台を置いた休憩スペースがあり、床に投影された映像では、池を泳ぐ鯉のイメージがループしていた。

次のコーナーにもまた小さな机と椅子を置いた制作スペースがあり、見ると Katei's lesson: Copying the master とあり、つまり「臨画」を体験するワークショップであることがわかった。壁面に展示された鳥の素描を写してみよう、という趣旨で、来場者が描いた素描は空いた壁面に掲示できる仕組みになっていた。このスペースの展示ケースに収められていたのが大英博物館から借用した石橋和訓の魚介図である。

次の区画にも造花の桜の木とベンチがあり、お花見のような形でベンチに座ると、前の壁面にはプロジェクターで映像が投影されていた。映像は Shodo(calligraphy) 書道のデモンストレーションであった。

最後のコーナーは End Products と題され、日本の絵画がさまざまなフォーマット、たとえば Hanging scrolls, folding screens, sliding doors, handscrolls, fans and albums

などの形式で完成作となったことを解説していた。サンプルとして屏風の模型が中央に置かれ、実作品として大英博物館から借用した石橋和訓の軸装の鷹図が展示されていた。

全体を通してみると、教育普及の視点が徹底しており、日本絵画の形式についての理解が深まるような工夫が印象的であった。

おわりに — 展覧会の意義と今後の課題

以上振り返ったが、本展覧会の意義は何より日本国内ですら忘れられつつある瀧和亭の知られざる作品群を解明し、さらに日英両国で認知度の低い石橋和訓にも光を当てたことである。バックランド氏の緻密な調査研究の賜物といえる。

展覧会では和亭の下絵と思われる大判の紙本作品と、素描の小品が展示されていたが、このうち落款が和亭のものは本人の作品の下図と判断できるが、和亭の名でも明らかに本人の筆跡ではないもので裏面に和訓の落款が残されているものもあった。それらは和訓による師の作品の臨画であろうし、そのほかにも臨画や模写ではなく和訓自身の手と思われる無款の素描もあった。さらに和訓の筆には見えない無款の素描もあり、画塾の別の門人の作かもしれない。今後は各素描のオーサーシップの同定が課題となるだろう。その調査により畹香館でどのような教育がなされていたかの一端が解明できるものと期待できる。

【註】

- (1) Rosina Buckland, *Painting Nature for the Nation: Taki Katei and the Challenges to Sinophile Culture in Meiji Japan*, Brill, 2013, pp.76-81.
- (2) Ha-il Kim, *Taki Katei's drawings: A Journey from Japan to Liverpool*, National Museums Liverpool official website. <https://www.liverpoolmuseums.org.uk/stories/taki-kateis-drawings-journey-japan-liverpool> (2022 年 1 月 31 日最終閲覧)
- (3) Kazunori Ishibashi, *Sir Adrian Boulton*, 1923, oil on canvas, Royal College of Music, Purchased, 1978.
- (4) Arthur Finch, Panels by Mr. Kazunori Ishibashi: An Artists of the Old Japanese School, *The American Magazine of Art*, vol.8, No. 9, July 1917. pp.344-350.

※なお本展覧会の特設サイトはその後も公開されており、ヴァーチャルツアーで展覧会場の様子を見ることが出来る。

<https://www.liverpoolmuseums.org.uk/virtual-tours/drawing-nature-taki-kateis-japan-virtual-tour> (2022 年 1 月 31 日最終閲覧)

[図版典拠]

図 1, 2, 3 すべて筆者撮影

[謝辞]

本稿をまとめるにあたり、つぎの方々、機関のご協力をいただきました。記して御礼申し上げます。
ジョーンズ百枝氏、大英博物館 ロジーナ・バックランド氏。

[付記]

本稿は JSPS 科研費 19KK0001 国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 (B)) 『サードフォースの美術史 1880-1920—在英日本人ネットワークの研究』 (研究代表者: 五十殿利治) の助成を受けたものです。

(はやし みちこ)